

幼児教育

1 「幼稚園教育要領」等（*）の実施上のポイント

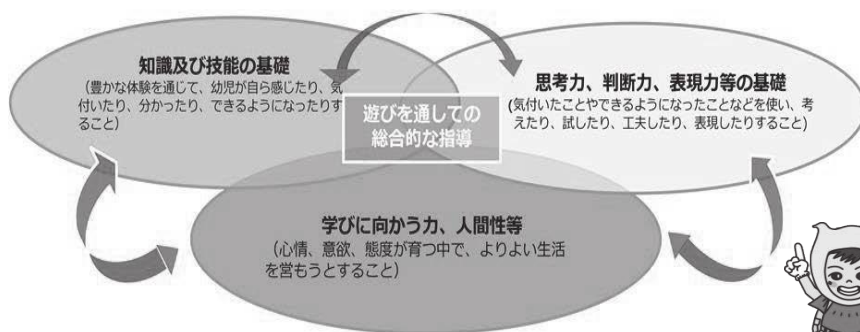
*「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「保育所保育指針」

(1) 「幼稚園教育要領」等に沿った幼児教育の展開

- 「環境を通して行う教育」が基本。
- 幼児期において育みたい資質・能力を明確化。
- 5歳児後半の具体的な姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確にし、小学校と共有することにより幼保小の円滑な接続を推進。
- 幼児一人一人のよさや可能性を把握するなど幼児理解に基づいた評価を実施。
- 主体的・対話的で深い学びが実現することを意識した体験の多様性と関連性を重視。

① 幼児期において育みたい資質・能力

環境を通して行う教育



小学校以降と同様に、資質・能力が三つの柱に整理されています。幼児教育では、この資質・能力を「幼稚園教育要領」等の5領域の枠組みにおいて、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育むこととしています。

② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、それぞれの時期にふさわしい遊びや生活を積み重ねることにより、特に5歳児後半に見られる姿であり、育ちの方向性を示すものである。これらの姿を念頭に、園においては、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり、必要な援助を行ったりすることが大切である。また、実際の指導では、以下の点に十分留意する必要がある。

- 【留意点】○方向目標であり、到達目標ではない。
○一つずつ取り出して指導したり、評価したりするものではない。
○全ての子どもに同じように見られるものではない。

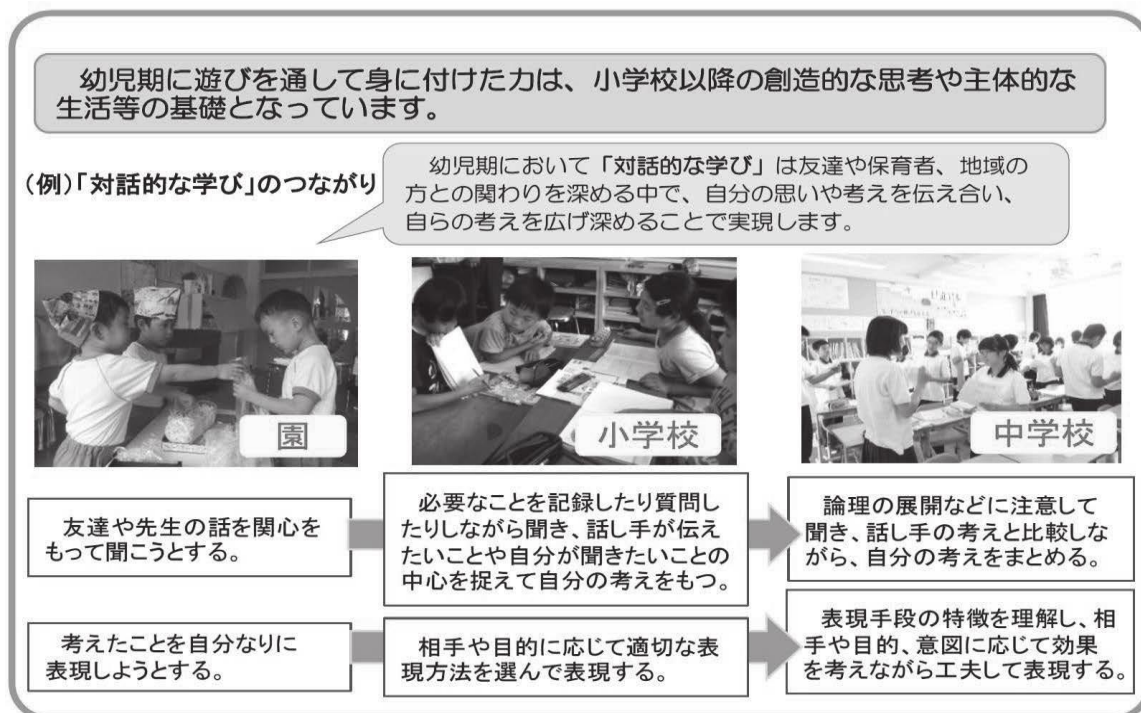


小学校においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが各教科等の学習に円滑に接続されるような指導の工夫を行うことが大切です。

(2) 幼児期に身に付けた力を小学校以降の学びにつなぐ

① 育ちと学びの連続性の確保

幼児期の教育の特性である遊びを通しての総合的な指導が、義務教育及びその後の教育の基礎を培うことから、幼児期の教育と小学校以降の教育のつながりを意識した教育が組織的に行われることが重要である。



乳幼児期の心動く直接的な体験や遊びを通して育まれた主体性は、小学校以降の「主体的な学び」につながります。また、友達や保育者との温かい関係の中で育まれた協同性やコミュニケーション力等は、「対話的な学び」につながっています。



② 円滑な連携・接続のための取組のポイント

○園は、幼児期の教育における成果を小学校へ確実につなぐこと

- ・幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や生活態度などの基礎を培う。
- ・小学校での生活や教科等の学習を見通し、子ども達の遊びの中の興味・関心の芽を広げる。

○小学校は、園での体験や学びを、小学校での学びに生かすこと

- ・幼児期の遊びや生活を通して育まれた資質や能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうようにする。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を図り、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等への学習に円滑に移行する。
- ・幼児教育で身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつなぎ、子ども達の資質・能力を伸ばしていくことを小学校教職員が共通理解して取組を推進する。

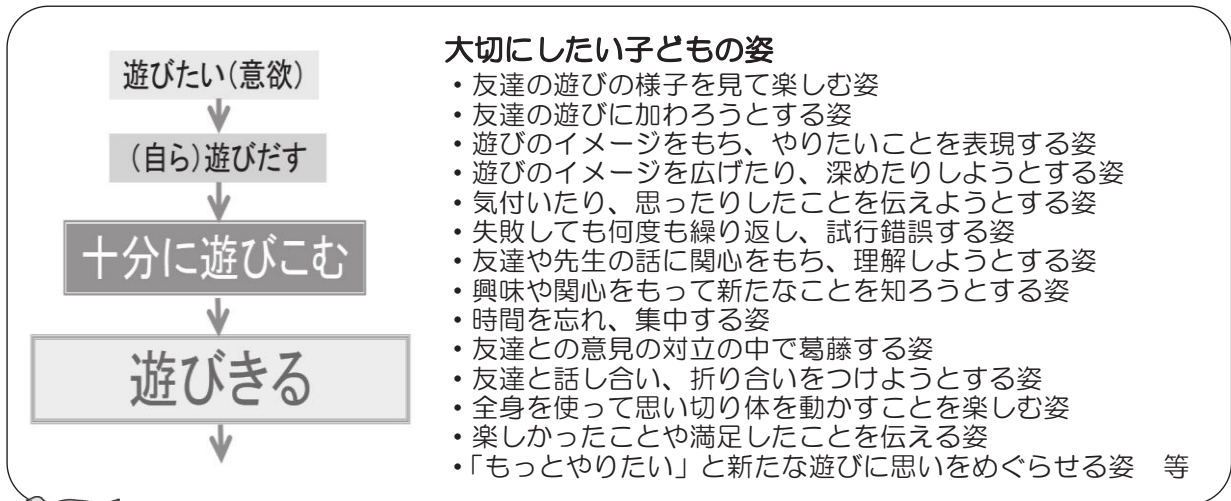
○園と小学校は、互いの教育内容を改善・充実させる取組へと進展していくこと

- ・園と小学校の教職員が互いの保育や学習場面を参観・体験し、教育内容や子どもの姿について協議する研修等を計画的に実施するとともに、その内容を充実させる。
- ・園児と児童の交流活動を保育・教育課程に位置付け、ねらいが明確で充実した互惠性のある活動としたり、教職員の合同研修会等を定期的に行ったりする。
- ・幼保小の互いの子どもの育ちや学びをつなげるための接続カリキュラムを編成する。

2 「遊びきる子ども」の育成のために

(1) 「遊びきる」とは

遊びの楽しさは、子どもが**遊びたい**という意欲から、自ら**遊びだす**ことで始まる。自発的な活動としての遊びが充実し、遊びに集中する中で、保育者や友達に自分の思いを伝えたり、考えを表現したりしながら**遊びこむ**ことで、遊びの楽しさやおもしろさが深まったり広がったりする。十分に遊びこむことが**遊びきる**ことにつながり、遊びきることで心地よい満足感や達成感を味わっていく。このような遊びの繰り返しが、義務教育以降の学びの土台となる力を育むこととなる。



保育者は、このような子どもの姿を丁寧に見取ると共に、遊ぶ場と時間を保障し、心ゆくまで遊びきるができる環境を構成することが必要です。

(2) 遊びの中の学び

遊びは、乳幼児期にふさわしい活動の在り方であり、遊びを通して、たくさんの学びが生まれる。遊びの中で、子どもが身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、子どもと共によりよい教育環境を創造するよう努めることが求められる。

砂を触ったり、落としたり、固めたり、並べたりする中で、遊びのイメージを広げる。

砂を運んだり、全身を使って掘ったりすることを繰り返し、進んで体を動かす楽しさを味わう。

友達の遊びを真似たり、一緒に遊ぶ方法を話し合ったりすることで、人と関わる楽しさに気付く。

【4 歳児の例】

共通の目的に向かって、友達と協力して取り組む楽しさを味わう。

砂の色の違いや性質に気付き、試したり、工夫したりする。

遊びに使った道具の片付けをすることで、きまりを守る気持ちよさを感じる。

団子の数を数えたり、大きさを比べたりして、数量や図形などに興味をもつ。

子どもは遊びを通してたくさんのことを学んでいます。子どもが経験していることや育ちと学びを的確に捉えて、評価し、一人一人のよさや可能性などを把握しながら、指導の改善に生かすことが大切です。



(3) 「遊びきる子ども」を育むための具体的な取組

※「鳥取県幼児教育振興プログラム（第2次改訂版）」より、一部抜粋

①学びの基礎づくり

◇心が揺さぶられる体験の充実

- ・「なんだろう」「なぜかな」という問いが生まれる体験の保障
- ・子ども同士の関わりの中で、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえる環境づくり

◇表現する過程を楽しめる工夫

- ・遊具や用具など、様々な素材や表現の仕方に親しめるような環境構成の工夫
- ・友達との関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わう活動の蓄積

◇言葉による伝え合い、言葉に対する感覚を豊かにする活動の工夫

- ・自分の感じたことや考えたことを言葉で伝えようとする意欲の育成

◇絵本や物語、童謡などに親しむ活動の充実

- ・地域に伝わる民話・伝統的な遊び、わらべうた・童謡唱歌などを取り入れた活動の工夫 等

②豊かな人間性の醸成

◇様々な人との関わりを深める活動の工夫

- ・異年齢の乳幼児、小・中・高校生、高齢者、外国籍の人、障がいのある幼児児童生徒、地域の人々との交流
- ・協同する経験を積み重ねることの工夫

◇愛情や信頼関係、自己肯定感を育む援助

- ・失敗しても認めてもらえるという安心感のある受容的関わり

◇道徳性の芽生えを培う活動の充実

- ・葛藤やつまずきを体験し、乗り越えることにより、人に対する信頼感や思いやりの気持ちを育む活動への配慮

◇規範意識の芽生えを育む活動の充実

- ・体験を重ねながらまじりの必要性に気付き、自分の気持ちを調整する力の育成

◇生命を大切にすることを養う活動の工夫

- ・身近な動植物に親しみをもって接し、生命の不思議さや尊さに気付いたり、命あるものを大切にしたりする気持ちを育む活動

◇自分とは異なる感情や表現の仕方があることに気付く体験の積み重ね

- ・自分の思いを言葉にすることの楽しさ、保育者や友達が話を聞いてくれることの喜びの体得 等

③健康な体づくり

◇基本的な生活習慣の定着

- ・乳幼児の生活リズム、基本的な生活習慣の定着のための取組
- ・「早寝・早起き・朝ごはん」、あいさつ等、家庭や地域の学校等と連携した取組

◇進んで体を動かす活動の充実

- ・遊びに夢中になる中で多様な動きが身に付くような働きかけや環境づくり
- ・地域の自然環境を生かした外遊びの充実

◇食に関する活動の充実

- ・和やかな雰囲気、食べる楽しさ・喜び、様々な食べ物への興味・関心を高める活動
- ・家庭での食生活やアレルギーへの配慮、食べ物の大切さや感謝の気持ちを育むことへの配慮 等

子どもや家庭、地域等、園の実態に応じた取組の推進が求められています。



(4) 評価について

① 幼児理解に基づいた評価の実施

- 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かす。その際、評価によって捉えるものではないことに留意する。
- 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにする。

幼児理解を進めるには、幼児を肯定的に見ることが重要です。幼児の行動の背景に留意し、以下の視点を持って肯定的に発達を捉えることが大切です。

- ・様々な幼児の姿を発達していく姿として捉える。
- ・その幼児の持ち味を見付けて大切にす。
- ・その幼児の視点に立つ。

他児との比較や一定の基準に対する達成度ではないことに留意が必要です。



② 評価の妥当性や信頼性の確保

- 日々の記録やエピソード、写真など、幼児の評価の参考となる情報を生かす。
- 複数の教職員で判断の根拠となっている考え方を共有しながら、幼児のよさを捉える。
- 日頃から保護者に発達の状況を伝えるなど、幼児が育つ姿を保護者と共有する。
- 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用し、見落とししている点や一面的な捉えになっていないかを確認する。



幼児の変容が生み出されてきた様々な状況が適切だったか、以下の視点で振り返り評価し、指導の改善に生かすことが必要です。

- ・教師の関わり方は適切であったか。
- ・環境の構成はふさわしいものであったか。
- ・指導のねらいや内容は妥当なものであったか。

③ 指導要録の記入

- 「指導に関する記録」は、1年間の指導の過程の中で発達する姿を振り返ってまとめ直し、その幼児らしさや可能性を捉える観点から記入する。

幼稚園幼児指導要録（指導に関する記録） (様式の参考例)

項目	氏名	平成		年度		平成		年度		平成		年度	
		[学年の重点]		[学年の重点]		[学年の重点]		[学年の重点]		[学年の重点]		[学年の重点]	
性別	ねらい (発達を捉える視点)	[個人の重点]		[個人の重点]		[個人の重点]		[個人の重点]		[個人の重点]		[個人の重点]	
健康	健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 年度当初に、教育課程に基づき長期の見通しとして設定したもの(学年で同じものを記入) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 1年間を振り返って、当該幼児の指導について特に重視してきた点 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 「指導上参考となる事項」 具体的な興味や関心、遊びの傾向、生活への取り組み方など、年度当初の姿と比較して伸びようとしている面、よさや可能性を捉えて記載する。(他児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定ではない。) </div>											
人間関係	幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。												
社会生活	身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛憎や信頼感をもつ。												

最終年度の記入に当たっては、小学校等における指導に生かされるよう、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を活用し、幼児に育まれている資質・能力を記載します。また、小学校での指導の参考になるように、効果が見られた指導の過程等を具体的に記述することが必要です。

3 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた指導展開例

4歳児 実践事例 「どろんこ広場で遊ぼう～友達と一緒に遊ぶと楽しいな～」（8月）
 観点（人との関わり） 視点（協同性）

【園児の姿】

- ・自分の好きな遊びを見つけて友達と関わる姿が見られる。
- ・カエルの遊び場所や、オケラの家づくりをきっかけに砂や泥に触れて遊ぶことに興味が出てきた。
- ・友達の遊ぶ様子に目を向けて真似たり、どうやったらできるかなと疑問をもったりする姿がある。

【ねらい】

どろんこ遊びを通して、友達と意見を伝え合いながら、自分たちで遊びを進める楽しさを味わう。

【評価】

・気の合う友達とアイデアを共有し、教え合ったり、工夫したりしながら、どろんこ遊びを楽しんでいる。

【○子どもの活動 ★環境の構成 ■保育者の援助】

○自分で好きな遊びを選んで遊び出す。

【10の視点②】
体系的な学習の充実

【10の視点①】
魅力的な課題・教材の提示

今日もトンネルを作ろう。
ぼくは、トンネル名人だ。【自信】

先生、一緒に山を作ろう。
【安心感】

土と砂を混ぜて、ぎゅうっとしぼったらできるよ。
【アドバイス】

ぼくはかたい泥団子が作りたい。
【目的】

この土で泥団子ができるんだって。
【アイデアの共有】
【試行】

【10の視点⑥】
学び合う活動の充実

自分なりのイメージをもち、じっくりと遊びを楽しめるようにする。
★すぐに遊び出せる準備をする。
・砂遊びの道具を近くに置く。
・砂場の砂を湿らせておく。
・土をほぐしておく。
■昨日の遊びを振り返ることで、遊びのイメージを膨らませる。
★遊びの空間をゆったり取る。

友達と相談したり、自分の思いや考えを出し合ったりできる雰囲気をつくる。
■必要に応じて、同じ遊びを楽しもうとしている子どもの仲立ちをする。
■思いや気付きに共感しながら、必要に応じて、言葉を添えて子ども同士の思いをつなぐ。

○保育者や気の合う友達と一緒にどろんこ遊びを楽しむ。

火山みたいだね。
【イメージの共有】

今度はおっけい穴が空いたよ。
【発見】

もっと回りを高くしてみよう。
【試行錯誤】

【10の視点④】
思考の整理

黒土をもっと入れてみようよ。
【試行錯誤】
【夢中】

見て。コーヒーができた。
【発見】
【共感】

【10の視点⑦】
学習評価の推進

【10の視点⑧】
学習を振り返る活動の設定

共通の目的に向かって、試したり工夫したりできるようにする。
★必要な道具を出してほしいという子どもの要求に応えたり、どんな道具が必要か一緒に考えたりする。
■水を使って土を固めたり、泥水を作ったりして、遊びを広げている友達の遊びの様子を知らせる。
■試したり工夫したりする姿を認め、一緒に遊びを進める喜びにつなげる。
■工夫したことや困ったことを伝え合い、次に遊んでみたいことへのイメージを膨らませる。

○遊びについて振り返る。



十分な数の道具を準備したり広い空間を確保したりするなど、まずは、一人一人が主体的に遊びを楽しむための環境の構成がされています。さらに、継続した活動の中で、一人一人の思いや考えを認めたり、同じ目的をもった友達の考えに触れる機会を設けたりしたことで、考えを伝え合ったりよりよい方法を選んだりしながら、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わったと考えられます。このように、一人一人が十分遊びこめる環境とともに、子ども同士の関わりが深まる援助をすることにより、主体的・対話的で深い学びが実現していきます。